

「田原藩日記」にみる駆込寺

東京大学史料編纂所教授 佐藤孝之



機能に分けることができる（拙著『駆込寺と村社会』吉川弘文館、二〇〇六年）。

実は、この入寺が田原藩の村々でもたくさんあったことが、「田原藩日記」（以下、「日記」とする）から知られるのである。「日記」は、寛文十年（一六七〇）から明治期まで残存しており（田原市博物館所蔵）、文政十三年（一八三〇）分まで刊行されている。この「日記」の延宝九年（一六八二）六月二十五日～七月二十日条に、次のような事件が記されている。

① 田原町で、鉄砲にて殺生をした者が、今田村光福寺へ「寺入<sup>てらいり</sup>」し、これを受けた光福寺が藩と「御免」の交渉をし、「御免」になった。

ここでは「寺入」と称しているが、罪を犯した者が寺に駆け込み、住職を通じて藩に謝罪し、赦免されたのである（①の機能）。「日記」からは、このほか文化十三年（一八一六）までに一二五件の入寺の事例が拾える。

一方、寛文十年（一六七〇）三月十九日条に、  
 ② 田原町で、火元になった者が当行寺へ「山林」し、七日間在寺し、赦免された。とある事例では、入寺のことを「山林」といつている。「参林」と書く場合もあり、一二五件中「山（参）林」の用例が九五件にも昇り、これは遠江・三河で多くみられる表記である。山林には聖地（アジール）性があり、山林に建立されることにより寺院は聖地（アジール）性を持ち、寺院への駆け込みを山林と称するようになったといわれている。

また、③を「火元入寺」というが、これが一二五件中一一四件にも及び、入寺の殆どを占めている。これは、田原藩が藩法として火元の処罰に入寺を取り入れていたためである（②の機能）。①・②は、ともに田原町の事例であるが、ほかに登場する村は三ヶ村になり、多くの場合は菩提寺に入寺している。まさに、村の寺院はすべて駆込寺であったといえる。

「日記」には、ここに紹介した入寺に限らず、多様な出来事が記録されている。田原の近世史を紐解く上での宝庫であり、活用が期待される貴重な文化財といえる。



田原市史跡 渡辺華山 池ノ原幽居跡

「華山会報への寄稿」  
藩主に在国を  
すすめる諫状  
別所興一

前号で開国前の徳川日本では藩主諫言が至難だった事情を説明し、その苦しい状況で華山が儒教道徳に基づいて藩主諫言にとり組んだ手紙を紹介しました。今回は江戸詰め家老の華山が、天保八年（一八三七）十月二十二日に藩主三宅康直に呈上した諫言の書状を紹介します。

齋戒沐浴（水をかぶってミソギを）し、謹んで殿様のご意見を伺わせていただきます。先に佐藤半助（田原藩家老）が自筆の御用書を上呈したと存じますが、それと重なるものです。幕府に来春半ばまで江戸参府を免除していただく願書の件、殿様には多大なご苦勞をおかけすることになります。藩の経済の再建と領民のため、右の願書の提出をお願いできませんでしょうか。私どもが考えますのは、殿様のお勤めの本義は通常

通り参勤して江戸城に登ることか、それとも領民のために国元に滞在することか、そのどちらなのかという問題です。

大名たる者は、幕府から領地を分け与えられ、それを保持し領民を統治することが重要な本務ですから、自分の領中の住民の生殺与奪を自分の一存で決めることにもなります。ですから領民統治が重要な本務で、参勤の方は通常の任務の一つ、当面は軽い任務ということになります。したがって、来春半ばまで江戸参府の延期の願書を出すことが適当と愚考しますが、この件につき殿様ご自身のお考えをお伺いします。

一、右のようなことは、私どもも気づかなかったことですが、松下源太左衛門（藩主康直の実家である姫路藩酒井家の江戸家老）様の日のお話によれば、再度の凶荒が起こった際に直ちに国元滞在を申し出ることにはできないとのことで、佐藤半助が引き下がつて調査したところ、御同席中（三宅家と同じ江戸城帝鑑の間詰めの大名）の方々も同様なことにはできないとのことでした。

秋田様（陸奥三春藩主）の例では春半ばまで参勤を延期することのお話です。他方、半助が江戸出立前の寸翁（元姫路藩筆頭家老河合隼之助）に相談したところ、これまた参勤延期を是とすることを見でした。右のような判断は、何も大手様（姫路藩主酒井雅楽頭忠実）配下のお役人の考えに追随すべきというご意見ではなく、何事にも親切に相談にのってくださったご意見、しかも御一家同様にご心配してくださったご意見です。ですからこれまでとても有益な助言をいただき、ひとかたならぬ恩恵を蒙ってきたことを申し上げておきたいと存じます。

一、右の事につきあらかじめ殿様のお考えを伺い、ご相談いたしますのは、殿様が多大なご苦勞を蒙られていられること、特に江戸と違ってさびしい田舎の生活では万事に不自由されていることを、小生（渡辺登）も十分にお察し致し、私どもは断腸の思いを抱いてまいりました。それで、これまで幾度となく参勤延期を中止しようとして決定しかけたのですが、過ぎ越

目次

題字「華山会報」元華山会理事  
故小澤耕一氏

P ① 「田原藩日記」にみる駆込寺

佐藤孝之

P ② 藩主に在国をすすめる諫状

別所興一

P ② 目次

P ④ 渡辺華山『毛武遊記』⑬

P ⑧ 四州真景の旅 ①

旅の同行者

P ⑫ 研修視察 鎌倉・藤沢の

渡辺華山ゆかりの地

P ⑭ 華山の田原行（二十）

P ⑯ 公金財団法人華山会  
田原市博物館 からご案内



し方や行く末をよくよく考えますと、中止決定は致しかねたのです。ご領中のいつもの凶作とは申すものの、今年は岡物（麦など畑作物）は十分に収穫され、大豆やソバなどは不作ながら去年のような飢餓状態ではありませんでした。ですから領中の打撃はそれほどでもなかったのですが、現段階ではそれでも見通しが立てられないのです。

まず何よりもわが藩の経済は、乱れもつれた麻のような状態で、とても収束する形勢には見えません。大手様からの借金がだんだんかさんで、その返済は必死になつてもなかなか追いつかない状態です。特に諸国では豊作が当てはずれになり、わが藩だけが軽微な被害にとどまりましたが、当今では穀物の値段が下落し、とてもご安堵できる状態にはないので、ことにわが藩士の江戸在住の者は面扶持（扶持米が家族の人数により与えられる）ですが、御在所の藩士たちは一律二人扶持というありさまなのです。殿様が生活の上でどんなにご苦

痛を感じられましたも、御家来衆の苦勞を推察されましたら、来春半ばまでのご辛抱はものの数ではないと存じ上げます。殿様のお考えにかなうよう、骨の折れることだが何とかしるとか、精勤せよとか、苦勞すべしなどの指令が出されても、殿様ご自身の実行を伴わなければ、殿様のお考えはすべて空説法からせっぽうになつてしまいます。佐藤半助その他同役の家老衆や真木重郎兵衛（田原藩用人兼御勝手総元締）なども、みんな殿様のご苦勞を理解した上で、このように大いなる道理にかなつた政策を上呈するにしても、殿様の心証を害することを恐れて提言できないようでは、当面大任を負う者は力尽きて勢いを失います。

下々の家来たちはくたびれ果ててぼろぼろになり、その最終結果は殿様ご自身に覆いかぶさることになるのです。まことに一人物の一つの思いの中にも世の治乱興廢の源がありますから、よくよく恐れ慎しまなければいけないと痛感し、ここに私の所見を申し上げた次第です。

一、私の提言は死罪に値するかもしれませんが、本心を残らず申し上げます。たとえ春半ばまでの参勤延期の願書を出さなくても、また春半ばまで国元に滞在されても、来夏に幕府からお暇をもらつて帰国することはなおいっそう難しいことになりそうだと推察します。私どもは同役の者にそのような疑惑や推察の念を持たせないように、殿様のお立場から上下一致するようご統率くださることをお願い申し上げます。

もつぱら今日大任を負い、実行を迫られている者の間では、とかく殿様のお考えがどうなのか、心配でびくびくしており、薄氷を踏むような思いにさらされているように見受けられるからです。こうしたことは必ずや後日、国を危うくする端緒になると存じますので、何とぞ殿様におかれては天地の大道を念頭において辛抱され、ご不快にかこつけて勝手な振舞をなさらないようお願い申し上げます。また、同役たちは殿様の息遣いきづかいをさぐり、いつもどううしていいかわからずうろたえて

ていますから、かれらに疑念が生じないようひとえにご思案いただきたいのです。大名にふさわしい立ち居振舞を自覚して行動されることをお願い申し上げます。そうは申ししても、殿様が飲食や男女関係の欲望までも我慢されることを私は望んでいません。無礼千万の言葉を書きつけましたことをお許しください。

天保七、八年の飢饉に際し、藩主康直は国元領民の救済に当たるため幕府に参勤延期を申請しました。同八年の田原藩の「御玄関置帳」によれば、六月参勤が当初十月まで、さらに翌年冬中まで延期されたことがわかります。この手紙は、華山が藩主に対して再度の参勤延期願書に同意し、領民と難儀を共にし、藩主としての誠意を示すよう要請したものです。ここには他の重役では言えない藩主の生活姿勢の根幹を正す諫言が表明されています。また、酒井家の要人の忠告や三宅家家臣の切ない心情を紹介したりして、康直が納得しやすいよう親味な説明に留意しています。





廿日 晴

為<sup>ニ</sup>岩<sup>ニ</sup>本<sup>氏</sup>ノ作<sup>ル</sup>画<sup>ヲ</sup>。

玉甚来る。

天保二年（一八三二）十月二十日

岩本氏のために絵を描く。

玉上甚左衛門が来た。

○無源<sup>ハ</sup>、上州月田村<sup>ノ</sup>祝<sup>修</sup>験者<sup>ナリ</sup>、称<sup>ニ</sup>仙鏡院<sup>ト</sup>善<sup>ク</sup>字<sup>ヲ</sup>、其<sup>ノ</sup>体似<sup>ニ</sup>東江<sup>ニ</sup>、後<sup>ニ</sup>住<sup>ミ</sup>京師<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>善書<sup>ト</sup>知<sup>ラ</sup>ルト云<sup>フ</sup>、其<sup>ノ</sup>款或<sup>ハ</sup>作<sup>ニ</sup>同光劉<sup>ト</sup>不知<sup>ラ</sup>名字<sup>ヲ</sup>。

○玉甚<sup>ノ</sup>父玉江<sup>モ</sup>又善<sup>ク</sup>書<sup>ヲ</sup>、名高<sup>シ</sup>一郷<sup>ニ</sup>、已上上州三書家之<sup>二</sup>也<sup>（今一ツ失<sup>フ</sup>之<sup>ヲ</sup>）</sup>。

○無源（角田無幻）は上野国月田村（津久田村）の修験の者である。仙鏡院と名乗り、書が上手である。その書風は沢田東江に似ている。その後、京都に住み、書が上手なことをもって名が知られているという。その落款には仙鏡院光劉としたものもある。名字は知らない。

○玉上甚左衛門の父玉江もまた書が上手なことで、この郷で名高い。以上は、上野国の三書家の二

人である。もう一人は忘れてしまった。

※ 無源 角田（つのだ）無幻。一七四三—一八〇九。僧侶・書家。下野田村（吉岡町）の華蔵寺に生まれ、津久田村の林徳寺（天台修験宗）の養子となる。書を沢田東江に学ぶ。聖護院宮家の侍講を務める。

※ 上州月田村 津久田村。上野国勢多郡のうち（群馬県渋川市赤城町）。

※ 祝（修）験 修験道。仏教の一派で、靈験を得るための山中の修行と加持・祈祷・呪術儀礼を主とする。

※ 東江 沢田東江。一七三二—一七九六。江戸の書家・儒学者。名は鱗、のち鱗。

※ 京師（けいし）都。帝都。

※ 玉上甚左衛門 第6回（29号）参照。

○桐生<sup>ハ</sup>、流遇<sup>ノ</sup>者多<sup>シ</sup>。詩人如亭<sup>、</sup>市河寛斎<sup>名、</sup>大窪詩仏<sup>行、</sup>糸井君鳳<sup>翼、</sup>佐々木雲山<sup>名、</sup>天籟<sup>名、</sup>書家卷弘斎<sup>任、</sup>画工建涼岱<sup>名、</sup>吳竹沙<sup>主善。</sup>

○桐生には他郷から放浪して来る者が多い。詩人では如亭、市河寛斎（名）、大窪詩仏（名は行）、糸井君鳳（名は翼）、佐々木雲山（名）、天籟（名）、書家では卷弘斎（名は任）、画家では建涼岱（名）、吳竹沙（名は主善）らである。

※ 流遇 流寓（りゅうぐう）。他郷にさすらい住むこと。放浪して他国に住むこと。

※ 如亭 柏木如亭。一七六三—一八一九。江戸後

期の漢詩人。名は昶（ちやう）。市河寛斎の門下。大窪詩仏・菊地五山とならぶ化政期江戸詩壇の代表的詩人。

※ 市河寛斎 一七四九—一八二〇。江戸後期の儒学者・漢詩人。名は世寧、字は子静。上野国出身。昌平坂学問所に学び、富山藩校教授となった。

※ 大窪詩仏 一七六七—一八三七。江戸後期の漢詩人。名は行（こう）、字は天民（てんみん）。常陸国（いばらきけん）出身。

※ 糸井君鳳 ？—一八四一。江戸末期の儒者。名は高翼（よく）、字は君鳳、通称九兵衛。のち奥山榕斎と称す。

※ 佐々木雲山 宮沢雲山か。一七八一—一八五二。江戸後期の漢詩人。武蔵秩父の人。江戸で市河寛斎に学ぶ。

※ 天籟 館天籟（たちてんらい）。一七七八—一八二七。江戸後期の漢学者。文化年間桐生新町へ来遊し、翠屏吟社の塾頭となって漢詩を教授した。

※ 卷弘斎（まきこうさい） 卷菱湖（りょうこ）。一七七七—一八四三。江戸後期の漢学者・書家。新潟の人。十九歳で江戸に出る。名は大任・任、号は菱湖また弘斎。

※ 建涼岱 前号参照。

※ 吳竹沙（ちくさ） 一七七四—一八四四。名は主膳、字は巨宝。五十嵐竹沙ともいう。江戸時代後期の画家。越後（新潟）の人。

○下野国志若干卷、下野戸奈良、人石井吉兵衛著、吉兵衛、豪農、頗有慈悲仁之声、而

読書志、実学可嘉尚也。

○上毛国志十四卷、新田郡勢良田人、予已

得之。

○『下野国志』という何冊かの本は下野国戸奈良の人石井吉兵衛の著作である。吉兵衛は豪農で、たいへん情け深いと評判である。よく書物を読み、実学を志したことはほめたたえるべきである。

○『上野国志』十四卷は、新田郡世良田の人の著作である。私は、すでにこの書物を得た。

※ 下野国志 『国書総目録』等の辞書に出ている

『下野国志』は、河野守弘の著作で、嘉永元年（一八四八）に完成したもので、当時は未完成。

『国書人名辞典』に石井磯岳（吉兵衛）は出ているが、『下野国志』らしき著作は載っていない。しかし、石井吉兵衛著『下野国志』が当

時は世に出ているのであろう。

※ 戸奈良（となら） 下野国安蘇郡のうち（栃木県佐野市戸奈良町）。

※ 石井吉兵衛（きちべえ） 石井磯岳（きがく）

一七八四—一八四六。江戸後期の商人、社会事業家、儒者。村民に親孝行と勤勉を説くとともに、新田開発につとめた。

※ 実学 習った知識や技術がそのまま社会生活

に役立つような学問。

※ 嘉尚 ほめたたえる。

※ 上毛国志 『上野国志』。上野国の代表的な地誌。

新田郡世良田の毛呂権蔵の著。安永三年（一七七四）完成。

※ 勢良田 世良田。上野国新田郡のうち（群馬県太田市世良田町）。

○清水濱臣到桐生、主玉上甚左衛門家有機織歌。又有短歌曰、恵良洗里乃乙女尔

古登問、者桑原差志天行登以不奈理。

○生田万曾有国歌曰、世乃中乃親者志親尔

非登毛子与子乃道越尽世人廻児、以生田生已知記之。

○清水濱臣が桐生に来て、玉上甚左衛門の家に泊まったので、その家に機織り歌がある。また、

短歌があり、次のようである。「えらあらふさとのおとめにこととへばくわばらさしてゆくといふなり」

○生田万にかつて国歌があつて、次のようである。

「よのなかのおやはしおやにあらずともことこのみちをつくせひとのこ」生田万はすでに知人なので（桐生にゆかりの人ではないが）ここに記す。

※ 清水濱臣（はまおみ） 一七七六—一八二四。

江戸後期の歌人・国学者。村田春海に国学を学び、歌文をよくした。

※ 恵良洗里乃……万葉仮名の歌。「恵良洗」は『万葉集』にあり、楽しみ笑うの意味か。

※ 生田万 第2回（25号）参照。

※ 世乃中乃親……万葉仮名の歌。生田万は国学者で朱子学を批判しているが、この歌は朱子学思想とも合致する。

夜蘭溪邀飲す。南蘋、枯木寒鴉、李士達、紙本楓林停車図、伊孚九、写蘭を示、佳。よりに借摹す。その他雪舟、直信ハあしし。奥山昌庵、荒井玄圃もいたる。九野約あり。不來。

夜、蘭溪と酒をたくさん飲んだ。沈南蘋の「枯木寒鴉」、李士達の「紙本楓林停車図」、伊孚九の「写蘭」を見せられた。これらはたいへん良いので、借りて写した。その他、雪舟や直信の絵というのはよくない。奥山昌庵、荒井玄圃もやってきた。九野（石田常蔵）は先に約束があつて来られなかった。

※ 蘭溪 第11回（34号）参照。

※ 南蘋 沈南蘋（しんなんぴん）。生没年未詳。

中国、清代の画家。享保十六年（一七三二）長崎に来航、二年間滞在し、日本の花鳥画に影響を与えた。

※ 李士達 生没年未詳。中国、明代の画人。人物・山水画をよくした。

※ 伊孚九 生没年未詳。中国、清代の画家。享保五年（一七二〇）貿易商として長崎に来航。

日本の南画家に大きな影響を与えた。

※ 雪舟 一四二〇—一五〇六。室町後期の画僧。

日本水墨画の完成者。

※ 直信 狩野松栄。一五一九—九二。戦国・安土桃山時代の画家。狩野元信の三男。永徳の父。

※ あしし これらの作品が贗物であったか。

※ 奥山昌庵 第11回（34号）参照。

※ 荒井玄圃 前号参照。

※ 九野 石田常蔵。前号参照。

廿一日 晴

津久井氏を問ふ。紋屋佐兵衛といふ人（ママ）に逢ふ。又荻野清次郎に逢ふ（此紋屋佐兵衛といえるは式右衛門が姉の子を養ひて子とせし人なり。清次郎といえるは荻野清三郎が弟忠之助の次弟なり。この清次郎が姉は今尾祐廸のもとに嫁つぎて今足利にありとぞ）。

二十一日 晴

津久井祐斎を訪ねた。紋屋佐兵衛という人に会った。また荻野清次郎にも会った（この紋屋佐兵衛という人は、斎藤式右衛門の姉の子を養子とした人である。清次郎というのは、荻野清三郎の弟忠之助の二番目の弟である。この清次郎の姉は、今尾祐廸のもとに嫁いで、今は足利に住んでいるという）。

※ 津久井氏 津久井祐斎。一八一—一六一。桐生新町の医者。二代目津久井松宅（雨亭）の子。

※ 今尾祐廸（すけみち） 足利新田上町の医師、文人。国学者今尾清香は弟。京都の吉益南崖に医学を、江戸の朝川善庵に漢詩を学ぶ。安

政三年（二八五六）没。

のぶ（斎藤式右衛門が姉にて津久井松宅が妻となりしが、ことし三月夫におくれたり）云。ぬい事（このぬいといえるは松宅が一女にて、松宅ミまかりて祖母と母とにやしなわれ、ことしふ三月足利の遠（江）や忠四郎といえる呉服と仕立とをなりわひとせる商人にもうはれて後、其子と妻せんとやくし、かの祐廸仲人となりて内外に心をつくし、よろづ全きよし。予がいたりしを其母よろこびて、叔なる式右衛門、祖母なる人にも其ひと、なりてあでやかなるさまを物語らひにもせまほしと。去る十三日右桐生の絹市なれば、又忠助も来、買序あれば、江戸よりの賓あるを申遣り、後の市十七日に路のほど遠ければ、馬をやとひのせて来て予に逢せたり。そのさまいと優に女びて、又おさなきふるまひも打まじりて、いとめでたし）。

のぶ（斎藤式右衛門の姉で、津久井松宅の妻となっていたが、今年の三月、夫に先立たれてしまった）が言う。ぬいのことだけれど（このぬいといえるのは、松宅の娘であって、松宅が亡くなつてからは祖母と母とに養われて、今年七月、足利にある近江屋忠四郎という呉服屋と仕立屋を仕事とする商人にもらわれて、将来その子の妻にするという約束をして、先述の祐廸が仲人となって内と外に心を配ってすべてがうまくいっているということだ。私が桐生にやってきたのをその母が喜んで、叔父である式右衛門や祖母である人にもぬい

の立派に成長してあでやかになった様子を伝えてもらいたいという。去る十三日が桐生の絹市だったので、また、忠助も来て、仕入れのついでに、江戸から来た客（華山のこと）があることを伝えてやったところ、その次の市の十七日に、（足利から桐生までは）道が遠いので、馬を雇って乗せて来て、私に合わせた。ぬいの子は、たいへんあでやかで女びているが、まだ子どもっぽいふるまひも混じっていて、印象がたいへんよい）

※ ふ三月 文月。陰曆七月。

※ 内外（うちと） 内と外と。

※ 序 ついで。

ぬい女の図



去る十七日此方へ呼たる時、其父なる忠助が申様、おぬい事おとなびてこのと物いふさまたゞならず。いと見に忍ぬ事どもあれば、今親家にまいりたるを幸なれ。よく教玉へとて帰にければ、いと驚きてぬいよびて其事をたゞせし



かば、まことに根なき事にて、たゞせうとめハねたミ深くて、女男どもの言も疑ひおもひ常にひがひがしうて、夫なる忠七はこゝろやはらかなるものにてあれば、妻のミ家の政をもはらし一家安からずとぞ。

(のぶが、ぬいのことを話す) 去る十七日、こちら(桐生)へ(ぬいを)呼んだ時、その父である忠助が申しますには、「おぬいはすっかり大人びて、召し使っている小者と話す様子が普通でない。とても見るに忍びないこともあるので、今親の家に来ているのは幸いである。この機会によく教えてやってほしい」と言つて帰つた。そこで、たいへん驚いて、ぬいを呼んでそのことを問い詰める、全く根のないことであつて、ただ姑は妬み深くて、(召し使つてゐる)女や男たちの会話などを疑つて考え、あれこれねじけて言う癖があり、その夫である忠七は心が柔らかな人であるので、もつぱら妻のみで家政を切り回しており、一家が安泰ではないのです。

※ せうとめ 古語では「しうとめ」姑。

※ ひがひがし ひがんでゐる。(心が)曲がつてゐる。

※ 夫なる忠七 「近江や忠四郎」「忠助」と同一人物か。「近江や忠四郎」は商店名とも考えられる。

か、レバ行すゑの事おもひはかるに、よめハ母の養ひをもはら受け侍るからは、いかで終りを能する事あらんや、はた夫とならん「と」いえ

るおのこは十二、ぬいは十四に侍れば、これ又生ひ立いかなる事いでけんもはかるべからず。たとえばめで度しと見るものも、常にあい見るときは愛のさめ易きものにしあれば、まして男女の道ハ理もてせめがたく、ただ此情を必とすめり。かれこれと考ふるに今風波なからん事を思えど、などで其源の激揚をとむるやうあらんや、おのれかくおもふめれど、御身いかに思ひはかり玉ふや「と」いふ。

そういうわけですので、行く末のことを思いめぐらしますと、嫁は姑の影響をもつぱら受けるものですから、どうかして終わりまでうまくいくことができないだろうか、また夫となるという男は十二歳、ぬいは十四歳ですので、これまた成長してどのようなことが起こるかも分かりません。たとえば、すばらしいと見ていたものも、常に相見ていると愛情が冷めやすいものでありますし、まして男女の間のごとは理屈どおりにいくものではなく、もつぱらこの情によつてしまつてしよう。あれやこれやと考えますと、今は波風が立たないやうにと思つていまして、どうしてその根底にある情が激しく湧き上がるのを止める方法があるでしょうか。私はこのように思いますが、あなた様はどのようにお思いでしょうか、と言う。

※ 行すゑ 行く末。

※ 必とすめり。 きつとそうなるであらう。

さればかやうの事ハ、此地の人ならでは彼の人の実情も常のありさまもしるべうもあらず。又

事破るゝに及ても此地の風俗なれば、他郷の人のかう思ふやうハ益なきなれば、此家の後見頼たらん人と親しき家と五人組とやらんもあるべし、いかにといへば未それぞれへは申出ず。たゞ紋屋某と清次郎とに話せばかりにといふ。されば小木四郎兵衛ぬしにこそ先語ひて、それぞれへも一わたり申さんとてこの日かえりたり。

「それならば、このようなことは、この土地の人でなければ、先方の実情も日常のありさまも知る方法がありません。また、もし事が破れるようなことになつたとしても、この土地の風習ですから、(私のような)よその土地の者がどう思うと言つても役に立たないことですから、この家の後見を頼めるような人、親しい家とか五人組とかいうものもあるでしょう。(そうした人にまず相談しては) どうでしょうか」と(私が)言えば、(のぶは)「まだそういう人々には話してありません。ただ紋屋と清次郎とに話したばかりです」という。そして、「それでは小木四郎兵衛様にまずお話をし、それからいまおっしゃつた方々にもひととおり相談いたします」と言つたので、この日(の話は)ここまでにして、私は)帰つた。

※ 風俗 生活上のならわし。しきたり。風習。

※ 小木四郎兵衛 古木四郎兵衛。江戸後期の桐生

新町の組頭。明治五年(一八七二)没。

(続)

『四州真景の旅』① 旅の同行者

研究会員 中神昌秀

一 序

四州真景図は、文政八年（一八二五）夏、華山三十三歳の年、利根川下流を旅行した時のスケッチ画入り紀行文と言えるものです。現在、重要文化財に指定されています。

華山は、六月二十九日朝六時、五名の友人の見送りを受け、半蔵門外の田原藩三宅家上屋敷から四州真景の旅に出発します。

この旅の同行者について、小沢耕一先生は、『登は門人椿椿山を伴って江戸を立ち、上総、下総、常陸、武蔵に遊び、そのスケッチ画絵巻「四州真景」四巻を作った』と書いています。

華山が最も信頼する椿椿人（一八〇一～一八五四）が同行したと考えるのは、とても自然であると言えます。椿山が現在の千葉県に縁があることも考慮したのかもしれませんが、椿山が同行者であるとする根拠を示していません。私は、椿山説の根拠について、先生に伺わなかったことを、今とても後悔しています。

二 小林左伝

私の知る限り、前述の文献以外は、四州真景の旅の同行者は、小林左伝であるとしています。この説は、四州真景六月二十九日の文章の中に、『小

網町加田屋長左衛門にて船を買、左伝来る』とある点を根拠としています。これは、日本橋小網町の船宿加田屋長左衛門で、船を仕立てた所へ、いそいそと左伝がやって来たという意味であり、同行者は左伝であるとします。

また、椿山説に対しては、『椿椿人、鈴木喜六、上田春洞、齋藤齋官、鷹見彌一右衛門、饞別』という記述があることから、椿山が饞別を贈ったにもかかわらず、その相手に同行することはありえないと批判しています。

左伝とはどんな、人物だったのでしょうか。文政四年（一八二二）の辛巳画稿縮本という華山のクロッキー帳とも言うべきものがあります。この中に、中国の四神伝説の玄武を形どった灯笼が描かれた項があり、「重灯笼絵図 小林左伝頼」という注記が書かれています。ここから、左伝が華山に絵を依頼したこと、そして姓は小林であることがわかります。

また、華山研究の大家、森銑三氏が「知己詩囊」と言う書籍の紹介していますが、その俳諧の部に



『麴町永田町外櫻田繪圖』万延元年（1860）  
国立国会図書館デジタルコレクションより



『魏町隼町 小林左伝』（「知己詩囊に見えたる人々」雑誌『傳記』昭和十一年十二月号、同誌十二年六月号補遺）という記述があり、左伝が俳人であることがわかります。

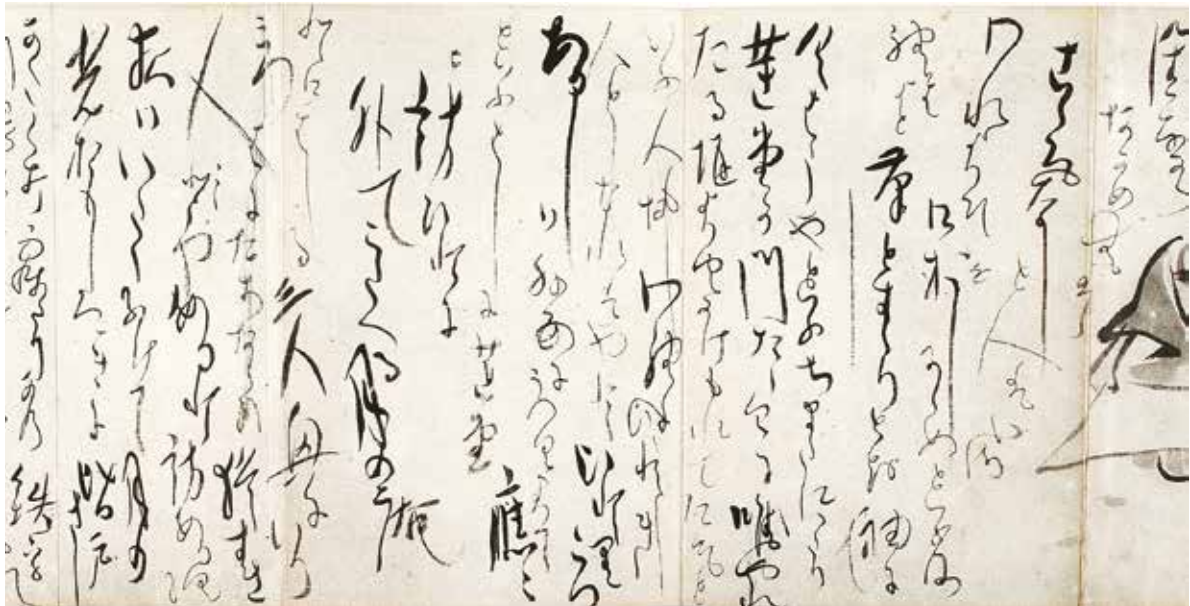
そして、魏町隼町については『魏町永田町外桜田絵図』によれば、隼町または隼丁という地名が、江戸城半蔵門正面から紀伊徳川家の上屋敷にかけて三区画があり、いずれも田原藩上屋敷から一キロ以内にあります。ここから華山宅の近くに、左伝が住んでいたことがわかります。

### 三 小林蓮堂

旅の同行者については、四州真景本文の中にも一ヶ所記述があります。『木ヲロシ下、問屋七之助、塩煎餅 十六文、蓮堂 百疋、肴シギヤキ 四十八文』という記述です。これは、木下（千葉県印西市）で問屋場を営む七之助で、塩煎餅を買い代金十六文、蓮堂が百疋（千文、四分の一両）を出し、茄子の炒め物を食べた代金が四十八文であったという意味です。蓮堂という同行者と思われる人名が登場します。

話が突然変わりますが、ここで四州真景三部作の一つである刀祢遊記を紹介します。これは四州真景の旅の道中、銚子において、富豪大里桂磨（一七八三〜一八四五）を訪問した際、大里が、七月十五日夜、利根川に船を浮かべて華山一行を歓待したという話です。華山はその夜のことを記した、絵入りの巻物を後日、大里へ贈ったとされています。

刀祢遊記は、『盆のつきいつかいでくる、もし



『刀祢遊記』



『刀祢遊記』

らぬ膝の上に、松のかげさしのほれば』という、華山らしからぬ風流な文体で始まります。また絵も文人画風に描かれているのが特徴で、華山作品の中では異色のものです。この中の蓮堂という人名が登場する一節を引用します。『くはうやといふ、ちまたにいたり、蓮堂が門をたたくに垣より火かげもれて、たぞという人もなし』と記されています。これは、荒野（下総国海上郡荒野村）という所によって来て、蓮堂の家の門を叩くが、ただ破れた障子から行灯の灯りが漏れるだけで、ど

なたですかと言う人もいないという意味です。この他に二回、合計三回、文中に蓮堂の名が出てきます。

刀祢游記の中には、『三人又興にいり』という記述もあります。これは三人でまた愉快な時を過ごしたという意味です。蓮堂以外の名出てくるのは大里と、文末に『わたのへの能保流』という名で登場する華山だけですので、大里が歓待したのは、華山と蓮堂であることがわかります。従って、華山の同行者は蓮堂ということになります。

『游相日記』



蓮堂については、華山の日記や書簡に何度か出てきます。その一つが游相日記です。これは、三宅家譜調査ため、藩主庶子の三宅友信（一八〇七〜一八八六）の生母お銀さまを、里下りした相州小園村（神奈川県綾瀬市）へ訪ねた旅を書いたものです。この中の、天保二年（一八三一）九月二十日の記述に、『余はじめ厚木に来る。知る人だになし。唯小林蓮堂がおこしたる溝呂木宗兵衛と云う鉄物屋への手簡を携えたれば、梧庵走り入りてこれを達す。』とあります。これは、私ははじめて厚木に来た。ここには、知人はまったくいない。ただ、小林蓮堂が書いてくれた溝呂木宗兵衛という金物屋宛の手紙を持っていたので、高木梧庵（一八〇八〜一八六二）が走ってこれを届けてくれたという意味になります。ここに蓮堂が登場します。

また、華山が三宅家譜調査ため武州瓠尻（埼玉県熊谷市三尻）へ行き、上州桐生の妹茂登（一七九五〜一八六七）の嫁ぎ先へも立ち寄った旅を書いたものが、毛武游記です。この中の天保二年十月十一日の記述にも、『小林蓮堂を訪ひ、蕪村が画きしおくの細道の模本数枚遣わす』とあります。これは、小林蓮堂宅を訪問し、奥の細道を蕪村（一七一六〜一七八三）が模写した本の数ページを、蓮堂に授けたという意味です。ここにも蓮堂が登場します。

さらに、天保十一年（一八四〇）五月四日の華山が金子健四郎（一八一四〜一八六四）に宛てた書簡の中に『小林蓮堂も其後さた不承、これも甚案事申候』と書かれています。これは、小林蓮堂

もその後は何の音差沙汰もないが、一体どうしているのだろう、蓮堂のことがとても気に掛かるのだが、という意味です。池の原に蟄居となった華山が、手紙の中で江戸に住んでいた時に親しかった蓮堂のことを思う気持ちがつづられていきます。

四 四州真景の旅の同行者の人数

これまで同行者の人名について書いてきました。この旅の参加者はそもそも何人なのでしょう。人数について、四州真景六月二十九日の記述に、『釜谷宿二里八町鹿島屋 夕飯三人にて百四文』とあります。八幡（千葉県市川市）から二里八町の距離にある釜谷宿の旅籠鹿島屋で夕食をとる。勘定は三人で百四文であったと書かれています。ここから、三人で旅をしていたことが推定されます。

そして、三人の旅行者のうち一人は従僕であったと考えられます。その根拠は、毛武游記の同行者です。毛武游記の出発初日の天保二年十月十一日の記述に、『我僕足やみて一歩だにすすみえず、いかにせんともちせし行李と笈とを梧庵とともに互いに荷ひにして』と書かれています。これは、私が雇っている従僕は、疲れて足が止まってしまいました、一歩も歩けなくなりました。どうしたものかと思ひ、行李と、背負式の荷物入箱を高木梧庵と代わる代わる持ったという意味です。ここか



ら、毛武遊記の旅は、華山、門弟の梧庵、従僕の三人で行ったことがわかります。四州真景も三人での旅でしたので、その構成員は華山とその同行者に従僕の三人であったことが、推定されます。また、一人は従僕であったと考える消極的理由として刀祢遊記の記述です。三人で船遊びを楽しんだということですが、大里以外は二人で、華山、蓮堂でした。これは、一人は従僕であったため、歓待の対象とならなかったということではないかと考えます。

## 五 四州真景の旅の同行者は誰か

さて、同行者の話に戻りますが、四州真景本文の中に登場し、刀祢遊記の中に名前がでてくる小林蓮堂が同行者であることは、間違いありません。そして『左伝来る』という記述がある小林左伝もほぼ同行者であろうと考えられます。

四州真景の旅の同行者は小林蓮堂なのか小林左伝なのかという議論をすることも可能ですが、小林蓮堂と小林左伝は同一人物であると考えられるほうがよいように思います。

その根拠は、三人での旅で従僕を除くと、華山の同行者は一人であること。そして、小林蓮堂、小林左伝どちらも同行したとなれば、同一人物である以外考えられません。また、姓はどちらも小林であること、華山と親交があること、そしてどちらも俳人であることがあげられます。結論として、同行者は小林蓮堂であり、同一人物の小林左伝であるということになります。

## 六 『四州真景の旅』連載について

一般の人にとっては、華山だけでなく、江戸絵画全般が、親しみ易さに欠ける存在のように感じます。しかし、四州真景の絵画は華山に興味のない人でも、違和感なく受け入れられるものではないでしょうか。

四州真景は、私自身も華山作品の中で最も好きなものです。その中で『釜原』という真景図は特に気に入っています。

私だけでなく、四州真景に魅せられた研究者は多く、解説や論文がいくつも出版されています。ところで、それらの多くは、文章や絵の順に添って、注釈をつける形で解説されていますが、注釈の分量のバランスという制約があるため、一つのテーマを掘り下げて書くことが難しい面があります。出版されている書籍や論文を読むと、それが実感できると思います。

四州真景には、同行者や帰路の行程、旅の目的など、不明であったり、または未解明であったりする部分が多くあります。また、四州真景の真骨頂は何と言っても絵画ですが、絵画についても、美術的、地理的等、様々な観点から検討していく必要があります。そのような問題を、順不同で、一回ごとにテーマを設定して、できる限り読物風に解説するようにこの連載を進めて行こうと考えています。

今回は連載第一回ということで、四州真景の旅の同行者は誰かについて書きました。これから、華山が小林蓮堂（左伝）を伴って巡った利根川下

流を、読者の皆さんと共に旅をしたいと思えます。それでは、また、お会いしましょう。

### 参考文献

- 小沢耕一著『華山渡辺登』（改訂七版） 田原町教育委員会
- 小沢耕一編著『華山書簡集』 国書刊行会
- 小沢耕一編『華山年譜』 財団法人華山会
- 小沢耕一・芳賀登監修『渡辺華山集』 第一巻  
日記・紀行（上） 日本図書センター
- 関東地区博物館協会編『利根川流域の自然と文化』 茨城新聞社
- 佐藤昌介著『渡辺華山』 吉川弘文館
- 菅沼貞三著『華山の研究』 座右宝刊行会
- 菅沼貞三著『渡辺華山（人と芸術）』 二玄社
- 鈴木栄之亮編『華山先生錦心図譜』（上下巻） 東京美術青年会
- 鈴木進監修『覆刻渡辺華山真景・写生帖集成』 一輯 平凡社教育産業センター
- 鈴木清節編『華山全集』 華山会
- 芳賀徹著『渡辺華山 優しい旅人』 朝日新聞社
- 芳賀徹著『華山 四州真景』  
（平凡社ギャラリー22） 平凡社
- 森銑三著『森銑三著作集』 第六巻 中央公論社

平成二十七年年度華山・史学研究会研修視察  
鎌倉・藤沢の渡辺華山ゆかりの地

本年度の研修視察は、十一月二十一日(土)二十三日(日)の一泊二日、華山(二十九歳)が橘三郎(二十二歳。後の十代藩主三宅康明)と共に文政四年(一八二二)六月二十九日と翌七月一日に訪ねた鎌倉や藤沢ゆかりの地を巡りました。

当日豊橋駅に集合した会員は、加藤克己・柴田雅芳・鈴木利昌の三名で、午前九時二分発のこだま号に乗車し、既に乗車されていた池戸清子会員と合流し、小田原で東海道線に、大船で横須賀線に乗換、北鎌倉駅に正午前降り立ちました。

連休中の大変な混雑の中、やつと改札を出ると、「渡辺華山と鎌倉」(『日本文学風土学会紀事』三五号・二〇一一年)を執筆された鎌倉女子大元専任講師の高木由美子氏が、現地コーディネーターとして私達を温かく迎えてくれました。

駅前の円覚寺門前を眺めながら鎌倉街道に出て、江戸時代離縁を望む女性が駆け込んだ東慶寺を右に見て南下、建長寺を目指します。人混みを縫うように二十分歩いてやっと建長寺に到着、正式名は「巨福山(こぶくさん)建長興国禅寺」で、総門には「巨福山」の扁額が懸かり、巨の字の四

画目下には点が打たれています。これは筆の勢いのまま打たれたもので、百貫の重みがあるということから、「百貫点」と呼ばれています。

境内に入ると「建長寺の庭を箒で掃いたよう」と例えられるように、よく掃除が行き届いています。掃除は雲水の修行の一つだからです。国宝の梵鐘の隣に建つ嵩山(すうざん)門は修行道場の入り口である為、ここからは立ち入り禁止です。かつて華山が建長寺を訪問した御縁から、高木氏は日頃教えを頂く鎌倉五山第一位大本山建長寺の吉田正道老大師管長猥下に相談し、格別のご高配を頂き、山の上の道場で一同謁見の栄を賜る僥倖に恵まれました。その上、大覚禅師蘭溪道隆の眠る開山堂を参拝させて頂きました。また、連休中レストランの予約は難しい事から、昼食は特別に建長寺様の一室で、小津安二郎監督の好んだ「光泉」の弁当を頂きました。床の間には私達の来鎌に合わせて、華山と建長寺を訪ねた十代藩主三宅康明公(龍岳)御染筆の『緑毛龜』(高木由美子氏所蔵)が供養の為掛けられていました。この書について老師様は、「龜の字が甲羅に似せて書いているのが面白い」と、皆にお教え下さいました。老師様に深謝申し上げます。

昼食後は正保四年(一六四七)芝増上寺から移築された二代將軍夫人江の御霊(たま)屋で重要文化財の仏殿唐門や方丈庭園等を見学しました。



建長寺唐門(からもん)重文  
正保四年(一六四七)増上寺より移築



大本山建長寺吉田正道老大師管長猥下  
床の間に田原藩十代藩主三宅康明御染筆「緑毛龜」



鶴岡八幡宮までは下り坂を十分ほどで着きました。裏八幡から本殿に上がると、正面の石段下の舞殿から七五三等の参詣者が並んでいるのが見えました。連休中の鎌倉はどこも凄い人出です。参拝の後、華山も石段上から眺めた右に大銀杏（二〇一〇年倒れ、移植され、根元も残る）左に御神木の椰（ナギ）の木を確認し、石段を降りました。源氏池の畔を散策し、三月末に閉館が決まっている神奈川県立近代美術館鎌倉の建物を見てから境内を離れ、裏道を選んで鎌倉駅に向かいました。

宿泊先は藤沢駅前に予約していたので、海岸線の下見を兼ねて江ノ島電鉄で藤沢に向かいます。地元の通称・裏駅に辿り着き、本日の講師高木氏とは江ノ電改札口で別れ、ホームに向かいました。帰宅ラッシュ前の午後三時というのにホームは大混雑で、とても乗車できません。十五分待つて、やっと次の江ノ電に乗ることが出来ました。明日の行程をイメージし、海を眺めながら三十五分の旅。四両編成の先頭車両から降りたので、藤沢駅改札はすぐでした。夕食は駅近くで摂りました。

第二日は、まず一遍上人を祖とする時宗の総本山、遊行寺へ徒歩で向かいます。境内に藤沢市指定の天然記念物大イチョウを見ることができました。藤沢駅へ戻り、小田急江ノ島線で片瀬江ノ島駅へ向かいます。片瀬江の鳥観光案内所では江の島1dayパスポートを入手しました。江の島

弁天橋を渡り、いよいよ華山も見たであろう島内を巡ります。



江島神社辺津宮から八坂神社へ進んでいくと「文化五戊辰年十一月吉日」刻字の石灯籠があり、華山が歩いた時に既に建てられていたものでした。中津宮には更に古い安永六年市村座奉納灯籠一对、天明二年中村座奉納灯籠一对が現存し、江戸の人々の熱心な辨財天信仰を伝えています。昼食の後、服部南郭の詩碑や江の島岩屋を見ることができました。一日目から続いている歩みに疲れが出始めたので、徒歩で引き返すのはやめにして稚児ヶ淵から遊覧船べんてん丸（大人四百円）に

乗船しました。海上から江の島の外側を十分間楽しみ、江の島弁天橋まで戻りました。

江ノ電江の島駅へ徒歩で向かい、鎌倉方面行きホームから乗車し、途中車内から右手に江の島の姿を眺めながら長谷駅まで行き、鎌倉大仏の高徳院を目指すことにしました。翌日の月曜日は勤労感謝の日で連休となるため、車内も駅周辺も人だかりで、歩道に人があふれているため、前に進むのに思ったより時間がかかります。久しぶりに鎌倉大仏を拝むことができました。帰りは大仏前から鎌倉駅行きのバスに運良く乗り込むことができ、難なく鎌倉駅に戻ることができました。



鎌倉へ来たルートと逆の電車で小田原へ出て、豊橋を経由し、無事田原へ帰着することができました。

# 華山の田原行（二十）

二月二十二日（続）

「午飯をおはり俊二、喜六と吉胡より浦のわたりにいたらんとす。此日風あれど天晴ていとよし。」

昼食後、鈴木春山（俊二）と鈴木喜六と一緒に、吉胡から浦へ出かけます。この二人とは、よく領内の視察に出掛け、二月五日にも和地村へ視察に出かかっています（会報二十一号・二十二号）。今回の目的は記されていませんが、吉胡や浦については、『全楽堂日録』では、海岸を埋め立てた青尾新田拡張（二月十一日・会報二十四号）や海苔作り（二月十四日・会報二十五号）を話題にしていますので、それらの視察だったのかもしれませんが。

鈴木喜六は、納戸役で、四月十五日からの『参海雑志』の旅でも華山に同行します。

鈴木春山（一八〇一〜一八四六）は、田原藩医で、華山・伊藤鳳山とともに「田原には過ぎたる山が三つある、華山、春山、伊藤鳳山」と称されるほどの人物です。後に、藩校成章館の教授となります。西洋兵学を研究し、「三兵活法」「海上攻



鈴木春山邸跡

守略説」を訳し、国防の急務も説いています。

華山は、『全楽堂日録』の中で春山のことを、春治、俊二、俊二郎、俊三、春三などの名前で記しています。華山とは、文化十三年（一八三〇）に三宅友信の江戸巢鴨邸で初対面以来親しくな

り、天保六年（一八三五）、尚齒会<sup>①</sup>の蘭学研究者と交わるようになります。そして、華山の田原塾居中は、池ノ原を訪れ、華山を診察しています。

春山は、浦村に生まれましたが、文政六年（一八二二）に角場で蘭方医を開業します。春山の邸は、今の田原中学校運動場南側のフェンスのあたりにあって、現在「鈴木春山邸跡」の看板が立っている所です。

『田原町史』によると、天保二年（一八三一）「十一月一日午前七時頃、城北角場の春山宅で出火し、類焼はなかったが、彼の住宅は全焼した。」とあります。屋敷は全焼しましたが、「ついひぢ」（築泥・へい）は所々残っていたようです。このことを、華山は『全楽堂日録』の中で、

「俊二が旧宅の花を見る。やしきハ三とせばかりさきに火をうしなひてやきたり。ついひぢ所々のこりて、かのいもがかき根ハあれにけりと読出んもかくにや。」と記しています。

華山の記す「いもがかき根ハあれにけり」とは、『徒然草』の二十六段の「堀川院の百首の歌の中に昔見し妹が牆根は荒れにけりつばなまじりの菫のみして」と吉田兼好が引用した藤原公実の歌を指していると思われます。華山の教養の深さがうかがわれます。





「麦八青う」の碑

歌は、「普通通っていた恋人の家に久しぶりに来てみたら、垣根は荒れ果て、茅花に混じってスミレの花が咲いているばかりだ。」という意味です。「つばな（茅花）」とは、イネ科の多年草の「ちがや（茅萱）」の穂のことです。華山が表したかつ

たのは、下の句の「つばなまじりの葦のみして」という荒れ果てて雑草が生い茂っていた中に、花だけが咲いているということだったと思います。「俊二が旧宅の花」が何かは不明ですが、華山がこの歌を記していることや季節から考えると、葦だったのかもしれない。

① 尚歯会とは、紀州藩儒遠藤勝助が主催した飢饉対策のための会で、儒学者や蘭学者の参加により、新知識や情報交換の会合となつていきます。華山や高野長英も参加し、外国の様子の研究も行うようになります。天保十年（一八三九）、華山と長英が断罪された蚕社の獄により壊滅します。蚕社の獄は、従来尚歯会への弾圧とみられていましたが、近年、田中弘之氏の研究（『蚕社の獄』のすべて）二〇一一年・吉川弘文館）により、新しい見方がなされています。

「麦八青うしげり桜ハしろく椿ハあかく竹のむらだちたる上に蔵王山秀たるさまいとよし。」次に、「北来に到らんとす。」とあるので、華山がこの景色を見たのは、春山の旧宅跡から北荒井（北来）にかけてだと思えます。蔵王山麓は、昭和五十年代の宅地開発により、住宅が立ち並び、人工の色にあふれる地域となりましたが、華山は、当時の情景を見事に活写していて、華山の見た景

色を眼前に浮かべることができません。「四州真景」のように、このあたりのスケッチが残っていないのが残念でなりません。

華山の表現力は、絵画だけでなく、このように日常見られる何気ない風景を切り取り、簡潔な文章にまとめるところにも表れています。二月十二日（会報二十五号）で紹介した「ほうべ」の「浜辺下らんとする数丈の谷あり。金屏を折空並べたらん様に黄赤うちまぢりたる中に松の生ひ出る風光言んかたなし。」という表現に共通するものがあるとします。

芳賀徹氏は、『渡辺華山 優しい旅びと』（一九八六年・朝日新聞社）の一九一ページで、「現田原町の華山神社や華山記念館は呆れるほど殺風景なコンクリートの建物で、この徳川武士の優しさを慕って訪ねる者を落胆させるに十分だが、せめてその一隅か、田原の町の古びた一角に、右の一行を刻んだ自然石など目立たぬように置いてはどうだろうか。」と、華山のこの描写についての提案をしていますが、上掲の写真のように、現在、田原市博物館北西に、この文章を刻んだ碑が設置されています。

研究会員 柴田雅芳

（続）

公益財団法人華山会  
田原市博物館  
田原市渥美郷土資料館  
からぶこ案内

田原市博物館企画展のご案内

三月二十六日(土)～五月十五日(日)

春の企画展 田原の美術 道家珍彦  
展―シルクロードと渥美―

(企画展示室)

シルクロードや渥美半島の風景など、渥美半島を拠点に活躍されている道家氏の初期作品から最新作品、代表作品を含め展示します。

道家珍彦氏によるギャラリートーク  
四月十六日(土) 午前十一時  
ワークショップ「日本画材で絵を描こう」 五月八日(日) 午後一時三十分～午後三時  
講師：道家珍彦氏 対象：小学五年生以上 定員：15名(要予約・先着順)  
材料費：300円  
同時開催：生誕200年渡辺如山(特別展示室)

七月九日(土)～九月四日(日)

夏の企画展 川崎のぼる汗と涙と笑いと展

(企画展示室一・二)

1966年、『週刊少年マガジン』で「巨人の星」の連載開始。父子の相克を軸にした野球マンガは、川崎

のぼるが作画を担当し、人気マンガとなる。「いなかっぺ大将」「荒野の少年イサム」「てんとう虫の歌」の原画など約320点を展示。



いなかっぺ大将  
小学館 小学3年生  
1970(昭和45)年2月号

同時開催：渡辺華山名品選(特別展示室)重要文化財孔子像・馬図(絵馬)なども展示します。  
詳細はチラシ等でお知らせします。

十月二十九日(土)～十一月二十七日(日)

秋の企画展 万葉千首完成50年 鈴木翠軒の書々万葉の世界

(企画展示室一・二)

詳細はチラシ等でお知らせします。

平常展のご案内

五月二十一日(土)～七月三日(日)

渡辺華山と椿椿山

(特別展示室)重要文化財も展示。

華椿系画家と松林桂月

(企画展示室一)

田原の美術 新収蔵 大岡澄雄

(企画展示室二)

九月十日(土)～十月二十三日(日)

華椿系の百花繚乱

(特別展示室・企画展示室一)重要文化財も展示  
田原の美術 石川華香  
(企画展示室二)

常設展示室では渡辺華山の生涯を展示しています。  
民俗資料館では田原の暮らしを中心に展示しています。  
渥美郷土資料館・赤羽根文化会館展示室でも所蔵品を展示しています。

観覧料

春の企画展

一般 四〇〇円(三二〇円)

夏・秋の企画展

一般 五〇〇円(四〇〇円)

夏のみ観覧の方は二一〇円(一六〇円)  
企画展開催時は小・中学生無料  
毎週土曜日は小中高生無料  
展示替初日は無料開放します。

平常時

一般 二一〇円(一六〇円)

小・中学生 一〇〇円(八〇円)

( )内は二十人以上の団体料金  
東三河在住の小中学生は、ほの国

子どもパスポートもご利用ください。  
休館 毎週月曜日(祝日の場合はその翌日)、展示替日

(公財)華山会から  
華山・史学研究会会員募集中

申込場所 華山会館事務室

毎月第四土曜日研究会

視察研修(年一回)に参加できます。

田原市博物館友の会会員募集中

入会申込書に年会費千円を添えてお申し込みください。

特典

博物館・吉胡貝塚資料館への無料入館  
展覧会・催し物のお知らせ  
見学会に参加できます。  
博物館だより・華山会報をお送りします。

華山会報 第二十六号

平成二十八年四月十一日発行  
編集発行 公益財団法人華山会

理事長 鈴木 愿

常務理事 山田憲一

事務局長 讃岐俊宣

〒四四一―三四二―一

愛知県田原市田原町巴江二二の一

TEL 〇五三一・二二・一七〇〇

FAX 〇五三一・二二・一七〇一

編集協力

田原市博物館

華山・史学研究会

会長 山田哲夫

吉川利明 加藤克己

石川洋一 小林一弘

林 哲志 中村正子

小川金一 柴田雅芳

中神昌秀 増山禎之

池戸清子

※華山会報ご希望の方は華山会館・田原市博物館にお申し出ください。  
次回発行予定 平成二十八年十一月一日